

## 認知症グループホームでの認知症ケアマッピング実施による ケアスタッフの仕事有能感と葛藤状況の変化

田島明子 1)、鈴木みずえ 2)、大江良信 3)、奥恵子 3)

1)聖隷クリストファー大学、2)浜松医科大学、3)グループホーム広尾

【はじめに】認知症ケアマッピング (Dementia Care Mapping:DCM、以下 DCM とする) はブラッドフォード大学の認知症研究グループによって開発された認知症に苦しむ人々に対するケアの質の向上を目的とした行動観察手法である。DCM の開発者である Kitwood 教授 (Bradford 大学老年心理学教授) が提唱した Person centred care (以下、PCC とする) に基づいた認知症高齢者のその人らしさ (Personhood) を重視する認知症ケアの理念である。先行研究ではケアスタッフの意識に変化に着目した研究はあったが、多くは「フィードバック」後にアンケート調査や意見交換を行い、ケアスタッフの意識の変化を調査したものであり、ケアスタッフが元々抱えていたかも知れないケアの有能感に関わる要因について DCM がどのような影響を与えたかについての調査研究が行われたものではない。本研究では実施前のインタビュー調査によりケアの有能感と葛藤状況に関わる要因を明らかにし、それに対して DCM 実施がどのような影響を与えたかを明らかにするために実施後にもケアスタッフにインタビュー調査を行い、DCM 前後の結果を比較検討することで DCM の意義を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】A 認知症グループホーム (A ユニット、B ユニット) において DCM を実施した。平成 26 年 2 月 17 日にケアスタッフ\*名に対して実施前インタビュー調査を実施、その後、平成 26 年 2 月 20 日 (6 時間) に DCM を実施した。実施後のインタビュー調査については今後実施予定である。実施前インタビューは、A ユニットのケアスタッフ 3 名、B ユニットのケアスタッフ 2 名に対して行った。

【倫理的配慮】認知症高齢者家族に対しては DCM や研究目的、配慮事項等についての説明を行い、署名にて同意書を得た。同意書を得た認知症高齢者のみ DCM を実施した。

【結果】①DCM 実施前インタビューの結果：4 名のケアスタッフに対して蘇[2005]の「介護職員の仕事有能感 15 項目」に沿って半構造的面接法を実施した。結果は有能感高・低群に分類された。有能感高群 (A、D 氏) は、自らのケアに問題があるとは捉えておらず、周囲のケアスタッフや環境に問題を感じ、有能感を低下させていることがわかった。具体的にはチームでの情報の共有ができておらず、動きが悪いといったことであった。有能感低群 (B、C 氏) は、自らの知識、技術、経験が不十分であることを指摘していた。

② DCM 結果 (平成 26 年 2 月 20 日実施) : A ユニット : グループ WIB 値分布図は+3 が 60%、+1 が 35%、+5 が 2%、-1 が 1%であった。個人 WIB 値の平均が+2.2、行動カテゴリーコード分布図は A (36%)、E (15%)、F (18%) で多くを占めた。B ユニット : グループ WIB 値分布図は+3 が 50%、+1 が 45%、-1 が 5%であった。個人 WIB 値の平均が+1.9、行動カテゴリーコード分布図は A (20%)、I (34%)、F (16%) で多くを占めた。本結果は両ユニットとも入居者が気分や集中的な取り組みで良好な結果を示しており、他者との交流やパズル・絵画などの活動に積極的に取り組んでいたことを示している。

③ DCM 実施後インタビュー : DCM 実施前インタビュー、DCM 実施、フィードバックの際に関わり、またインタビュー時に仕事有能感が低かった B 氏にインタビューを実施予定である。

【今後の課題】今後 DCM を年間を通し 3 か月に 1 度程度継続的に行い、有能感高・低群において仕事葛藤状況がどのように変化していくかを検討していく。施設特徴からフィードバックに参加できないケアスタッフが多い。今後の検討課題である。